

アンドレ・マルローと『希望』

今日希望を語ることができるか

川上 勉

ただいまは法学部長の上田先生からたいへん身に余るご紹介をいただきました。とても緊張しております。本日は、この半年間進めてきました「外国の文学」講義の最終回であると同時に、法学会主催の退職記念の講演でもあります。とりわけ、このように最後にみなさんの前でお話をする機会を与えてくださいました法学部の方々にお礼申し上げます。また、半年間講義を聴いてくれた学生諸君にはまとめの講義というつもりで話をしたいと思います。

それにしても、あっという間に法学部での31年が過ぎてしまいました。が、たいへん理解ある先輩や同僚の先生方、それに友人のみなさんといっしょに仕事ができ、何とか無事に定年までこぎ着けることができたことを最初にお礼申し上げます。

人間不思議なもので、「最終の」とか、「記念の」ということばが付きますと、どうしてもこれまでの人生を振り返ってしまいますし、また、ここでこうして話している「自分とはいったい何ものか」ということを考えてしまいます。

シュルレアリスムを代表する作家であり詩人であるアンドレ・ブルトンに『ナジャ』（1928年）という作品があります。以前は、たとえばピカソの絵などの訳の分からないものを見ると「シュールだな」と言ったものですが、いまではブルトンもすっかり古典になりまして、私はこの『ナジャ』を20世紀を代表する小説だと思っています。その冒頭に、「私はいったい何ものだろうか。ある諺によれば、私が誰とつき合っている

かを知りさえすればいい、ということになる」という表現があります。こうして『ナジャ』という不思議な小説は、主人公がパリの街角で偶然知り合った、謎のような女性であるナジャとつき合う話なのですが、この「つき合う」ということが現代の人間にとってたいへん重要な課題であったことが、20世紀全体を通じてだんだん明らかになってまいります。なぜなら、時代が進むにつれて、われわれは他者とのつき合い方がわからなくなってきているからです。つまり、ブルトンは「誰とつき合っているか」と言いましたが、いまではむしろ、どのようにつき合っているか、あるいはつき合うことができるかが課題となっているということです。ところで、この「ナジャ」というのは、先ほど上田先生からもご紹介がありましたように、ロシア語で「希望」ということばの最初の部分だと、小説のなかでナジャ自身が説明するところがあります。20世紀の初め、それは希望を予想しうる時代であったことを示しています。

さて、このブルトンのことばの「つき合う相手」を「読んでいる本」と置き換えれば、もっとその人のことがわかるということになるかもしれません。(もっとも、最近の若者たちはあまり本を読まないし、つき合う相手もメールだったり、ケータイだったりして、このフランスの諺自体がもう時代遅れになっているのかもしれませんが)。

というわけで、私の個人的な本の話に少し「つき合っ」ていただきたいと思います。

私が初めて文学論といったものに接したのは、昭和28年に刊行された岩波書店の講座『文学』(全8巻)でした。

注：昭和28年をよく覚えているのは、当時中学三年生だったが、この年筑摩書房から『現代日本文学全集』(全99巻)の第一回配本『島崎藤村集』が発売され、あの黄色い堅牢な表紙と三段組みの本文に魅せられたことが忘れられないからである。

その第一巻の最初のページに「刊行のことば」が載ってしまっ、こ

れにとても強烈な印象、というか感動と言っていいものを覚えました。いまでも忘れることはありませんし、その後なにかにつけその影響を受けてきたと言えるかもしれません。それは簡潔な表現で、しかしたいへん力強くこう書かれていました。

文学は心の表現である。心がむすぼれているのに、文学がゆたかに花さくことはできない。しかし、心のむすぼれを解くためにも文学はなければならない。(中略)文学が、国民の一部だけのものであった時代は過ぎた。いまこそ文学は国民全体のものとなるべきである。国民はみずからの文学をもつべきである。このために努力することが私たちの生きる意味である。

「むすぼれている」という表現は現在ではあまり使われませんが、「気がふさいで、晴れ晴れしない」(広辞苑)という意味です。ところで、この「刊行のことば」は具体的に誰によって執筆されたのか、場合によっては岩波の編集部によるのかもしれませんが(私は何となく編集委員の一人である中野好夫あたりではないかと思いこんでいましたが)、このなかの「文学は国民全体のものとなるべきである」という表現に強く惹きつけられたのです。のちに「国民文学論」という論争にも発展した大きなテーマですが、当時はそんなことはわからず、文学とはこうあるべきなのだ、ただ漠然と感じていたということです。

こういう話をしますと、たぶん随分古くさい話だと思われるに違いありません。現在は国民全体どころか、すっかりグローバル化した時代なのであって、実際、岩波書店の『文学講座』もその後いくつか新しい企画で刊行されていますが、現在刊行中のものの第13巻は「ネーションを超えて」というタイトルになっております。もともと文学作品は国境を越えて読まれるという特徴を持っていますが、いまや作者の側でも国民性を超越したところで創作する段階に来ているということです。従って、

国民の視点から文学を論じるのはいかにも時代遅れということになります。しかし、本日私がお話ししたいのはそうしたネーションを超えたかどうかといった文学状況のことではありません。

注：現在刊行中の講座『文学』の「編集にあたって」には、「多くの文学が各々のネーション（国家、民族）を媒体として成立しているというのは、今日でも否定できない事実であるが、その一方で、二十世紀の文学作品と文学研究が示したように、文学はもはや一つの国境のなかには留まってはいない。ひとつの文学が一つの国の文化として独占されるということはありません。文学の研究ももはや国別の編年体のなかに安住しているわけにはいかない」と書かれている。

実は今回あらためてこの「刊行のことば」を開いてみて、別の箇所にひどく注意を引かれたのです。それは、

いまの日本のおかれている状態をおもうとき、私たちの心は暗くなる。どんなに努力してみても、私たちを閉ざしているこの壁をつき破ることはできないのではないかという気さえる。外から押しつけられるばかりでなく、内からもしめつけてくるこの途方もない力　そこから自由になるのは、私たちの手にあまる事業であろうか。

という表現です。「外から押しつけられる」（途方もない力）とは、学生諸君には全く想像もつかないことかもしれませんが、それは主としてアメリカ軍の圧力ということです。前年の昭和27年（1952）に日米安保条約が発効していますが、まだ戦後のアメリカ軍占領の影響が色濃く残っていた時期であります。いまでは日米の「パートナーシップ」などと言っていますが、この文章を読むと、なんだか現在の閉塞状態とまったく変わらないような気持ちになってまいります。

たとえば、一昨年（2002年）一年間の自殺者の数は3万人を超えてい

ます。実に5年連続で3万人を超えたということです。交通事故による死亡者の3倍以上に当たります。健康上の問題、経済・失業問題、さらには私などの理解の及ばないところですが、出会い系サイトによる自殺などが原因です。

さらにはまた、「年金不信」と言われる現象も強まって、国民年金の未納者が4割（20代では5割以上）近くに達しています。将来が見えてこないわけです。このような時代にわれわれは何を語ることができるのか、何を求めて生きていくべきなのか。ほんとうに希望を持つことができるのか。

注：『朝日新聞』（2003年7月25日付）によれば、2002年一年間に自殺した人は3万2143人で、前年より1101人増え、5年連続で3万人を超えたということである。そして、動機では「経済・生活問題」が大幅に増え、過去最多だった01年（6845人）を1095人上回る7940人となり、増加分のほとんどを占めたと書かれている。

また、7月24日付夕刊には、02年度の保険料納付率は62.8%で、前年度を8.1ポイント下回り、過去最低を更新した。すべての年齢層で前年度を下回ったが、若年層ほど低く、20歳から24歳は47.4%、25歳から29歳も49.4%と5割を切ったという記事が出ている。

さて、「文学は国民全体のものとなるべきである」ということを、「作家の責任」の問題として追求した人にジャン＝ポール・サルトルがいます。彼は第二次大戦後すぐに『現代』という雑誌を創刊しますが、その「創刊の辞」（1945年10月）のなかで、

今日では事態は進んだ。ドイツ軍のために筆を曲げたという廉で非難され
或いは処罰された作家たちが、悲痛な驚きの色を見せるまでに至ったのである。
「何だって？自分の書いたものが責任を生むのか？」と彼らはいふ。（中略）作
家には何としても逃れる道がないのである以上、われわれは作家がしっかり自
分の時代と一緒にいることを望むのだ。自分の時代が作家の唯一の機会なのだ。

時代は作家のために作られ、作家は時代のために作られている。(中略)作家は彼の時代のなかに状況づけられている。一つ一つの言葉はさまざまの反響を生むのだ。一つ一つの沈黙もまたその通り。(伊吹武彦訳—人文書院)

一般に「社会参加」或いは「政治参加」(アンガージュマン)と呼ばれている文学、あるいは作家についての認識です。一見してすぐわかるように、これには4年間のドイツ軍占領下という厳しい経験がもとになっていますが、この「作家は彼の時代のなかに状況づけられている」という認識はサルトルの生涯を通じて一貫したものであったと言えます。「沈黙することもまた作家の責任である」といった、たいへんストイックな考え方がいったいどこからもたらされたのだろうかと思って、私は卒論にサルトルの『存在と無』(1943年)を選びました。いま私は「『存在と無』を選びました」と言いましたが、この「選ぶ」ということが、この膨大な哲学書の基本的なテーマの一つです。サルトルは、いかにもサルトル的な表現によって、「人間は世界全体のなかで、自分自身を全体的に選ぶ」と述べて、人間という存在を「選択する存在」と規定しました。彼はまた、「われわれの存在はまさに根元的選択である」notre être est précisément notre choix originelとも言いかえています。私はこの「根元的選択」ということばにたいへん強い刺激を受けました。それはたとえばこういうことです。「私は20世紀という時代の、日中戦争が始まった翌年に、日本で生まれた」と言うことは、私は日本という場所、20世紀の前半という時代を根元的に選択したということになります。ふつう人はそれを宿命と言うかもしれない。しかしサルトルは根元的選択だと言いました。そしてまた、こうした根元的選択を「引き受ける」assumerとも言っております。この「根元的選択を引き受ける」という考えから、「責任」という概念も生まれてきます。さきほど言った作家の責任という考え方は、このようなサルトル自身の哲学的な思索に裏打ちされたもの

であったわけです。この場合の「責任」は、おそらく法律的な概念とは違って、あくまで哲学的、道徳的なものであるのは言うまでもありません。サルトルはまた、「この自己自身を選ぶという意識は不安と責任という二重の感情によって表現される」とも言っていて、責任と同時に不安も感じるということに注意しておく必要があります。選択を消極的に捉えると、「選択から逃れることができない」（選択の呪縛）という不安に陥ることになり、逆に選択を積極的に捉えると（選択の自由）責任を持つことになります。念のためにお断りしておきますが、この責任論は個人のレベルだけではなく、国家のレベルでも問題になります。「戦争責任論」などがそれに当たります。しかし、この大きな問題は、時間の関係もありますので、今日は触れないことにします。

しかし、このようなサルトルの考え方は、その後いろいろな批判の対象となります。その代表的なものは、ご承知のようにフランソワ・リオタールの「大きな物語」という批判です。時代は70年代にはいり、いわゆるポスト・モダンと言われる時期を迎えます。たとえばリオタールは、『ポスト・モダンの条件』（1979年）のなかで、「科学はみずからのステータスを正当化する言説を必要とし、その言説は哲学という名で呼ばれてきた。このメタ言説がはっきりとした仕方ではなんらかの大きな物語

<精神>の弁証法、意味の解釈学、理性的人間あるいは労働者としての主体の解放、富の発展に依拠しているとすれば、みずからの正当化のためにそうした物語に準拠する科学を、われわれは<モダン>と呼ぶことにする」（小林康夫訳）と述べて、「近代」の「大きな物語」を批判しています。リオタールの批判は直接にはマルクス主義を対象にしたものですが、こうしてサルトルの影響力も後退していくこととなります。たしかに選択が難しい時代となって、わが国でも「モラトリアム」ということばがはやったのは70年代の終わり頃だったと思いますが、モラトリアムによってみずからの選択を先送りする、いわば選択を一時的

に回避する時代がずっと今日まで続いていると言えます。

注：小此木啓吾の『モラトリアム人間の時代』は、1978年に刊行されてベストセラーとなったが、そのなかでは「企業の中では、今の職業を一生の仕事にするかと問われて、イエスと答えない青年が珍しくなくなったし、何を専攻するかときかれて、もうしばらく広くいろいろと勉強してからと答えるのが、大学院生や研究者の一般的風潮になってしまった。形の上では就職しても、その企業の職員として自分を本当の自分とは思わず、本当の自分をもっと別の何かになるべきだ、もっと素晴らしい何かになるはずだ、と思いながら、表面だけは会社の仕事をつつがなくこなし、周囲に無難に同調するタイプのサラリーマン」のことを「モラトリアム人間」と説明されていた。

たまたま昨年9月には「選択」の問題を扱った二冊の本が目にとまりました。一つは長山靖生の『若者はなぜ「決められない」か』（ちくま新書）、もう一つは仲正昌樹の『「不自由」論 「何でも自己決定」の限界』（ちくま新書）という本です。前者は、現在400万人とも言われているフリーターの生態を報告しながら、「今では、若者たちは卒業後もフリーターという形で、完全な「社会化」もしくは「会社化」を忌避する。この場合のフリーターは、学生ではないが正社員でもない状態で、その後の進路の自由度を残しておきたいという気持ちの表れだ。いわばモラトリアムの再延長である。「本当の自分」「本当に自分にあった仕事」が、まだ見つからないから、取りあえずはフリーターをしながら、いろいろな仕事を体験しようと思っている、とあるフリーターは言う」と書いています。つまり、モラトリアムを「社会化」あるいは「会社化」の忌避と捉えながら、フリーターの気持ちに一定の理解を示そうとしたものです。後者は、少し哲学的な視点から自由論を再検討しつつ、「選択」を「自己決定」ということばで、次のように言っています。

我々は、意識すると否とにかかわらず、日常的に無数の“自己決定”を行なっている。コンビニに行って買い物をするのも“自己決定”であるし、アパートを選ぶのも“自己決定”である。そうした限定された「状況」の中での“自己決定”が行なわれるのは不可避であるし、「自分では決められない」という態度を取り続けるのも、やはり「自己決定」の一形態である。恐らく、ミクロな状況における、あまりにもそれと気付かないような“ミニ自己決定”を何度も繰り返している内に、それらの経験が積み重なって、大きな自己決定をするための準備になっているのだろう。問題なのは、あたかも、共同体的な文脈抜きの「自己決定それ自体」があり得るかのような言説が一人歩きするなかで、どういう「状況」なのかという規定抜きに“自己決定”がなされるようになることだ。つまり、何に対する「自己決定」なのかよく分からないままに、“とにかく自己決定”という圧力が働いていることである。

「ミニ自己決定」の積み重ねが「大きな自己決定」の準備になるかどうかは検討を必要とすると思われるが、それはさておき、ここでは共同体的な圧力が働くなかでしか「自己決定」がなされないということが説明されています。いずれにしても、現在は「選択」ということが簡単にはなされない時代になっていることがよくわかります。選択ということはつねに未来に向かって選択することであり（過去を選択することはありえないことから）、未来に希望を見いだせないところに真の意味での選択はあり得ないということになります。このような時代に、われわれは「希望」ということばを語る事ができるのかどうか。いま「希望」ということばを発すると、なんだか新興宗教の教祖のようにしか聞こえないほど、このことばは死語になりつつあるのではないかと思われてきます。

実はサルトル自身がこの選択を回避するという事を皮肉を込めて描いている場面があります。『嘔吐』という小説は1938年に刊行されたサル

トル最初の長編小説ですが、主人公のアントワヌ・ロカンタンはブーヴィルというフランスの田舎町で図書館に通いながら研究を続けています。その図書館では一人の男が毎日熱心に読書しています。この独学者と呼ばれている男は、図書館にある蔵書を著作者のアルファベット順に読み進んでいて、7年かけていま頭文字のLまで来たところだということがわかります。全部読み終えるまでにあと何年かかるかわかりません。つまり、彼は図書館の本を全部読むことを「選択した」ことになりますが、それは、彼が無差別に読みすすんでいくわけですから、全部読み終えるまで選択を先送りしている姿でもあるわけです。ふつう人は何を読むかを決めてから本を借り出すわけですが、この独学者はおそらく、「真の選択をする」ためには、あらゆる本を読破したうえでなければ最終的に選択することができないと考えているように見えるのです。しかしそんなことは現実には不可能であり、馬鹿げたことでもある。サルトルが、独学者の姿を皮肉を込めて描いていると思われる理由です。現実生活における選択には、「純粋な選択」などありようはずがなく、妥協したり、不本意ながら選択せざるをえないといった場合がほとんどであるのは言うまでもありません。

ところで、サルトルの文学者としての考え方、生き方に最も影響を受けた戦後日本の作家に大江健三郎がいます。彼は学生時代からサルトルに影響を受けてきました。最近の『「自分の木」の下で』(2001年)という本の中でこう書いています。

私が大学に入って選んだのはフランス文学科で、サルトルという作家、哲学者をおもに読んでいました。そしてかれの本によく出て来た、choix選択、dignité威厳というフランス語の単語を見るたびに、「大水」のなかの少女の、屋根から屋根へと跳び移る様子を思い浮かべたのでした。

生きるための　　生き延びるための　　選択は、結局ひとりだけでやるほかあ

りません。自分にも、必死でそうしなければならぬ時がおとずれるだろう、
そう私は思いました。

大江がサルトルの「選択」という考え方に影響を受けていることがよくわかります。ところで、この中の「大水」のなかの少女という表現には説明が必要です。戦後まもなく彼の郷里ではよく川が氾濫した。ある時、二軒の家が流されて、片方の屋根の上に少女が乗っていた。流されていく家が下流の橋桁にぶつかりそうになったとき、少女は冷静に横の家に跳び移って難を逃れることができた、その時の少女の決断を言っているのです。ここで大江が言っているのは、選択には「勇気」が必要であり、また選択は自分一人の責任でなされねばならないということです。サルトルが問題にした選択も主として個人のレベルにおける選択です。しかしながら、選択は自分一人に関わる場合もあれば、日本という国家に関わる選択もあります。イラクに自衛隊を派遣するかどうかは国家の選択の問題です。個人としては派遣に反対であっても、諸外国からは日本は軍隊を派遣したと見なされるわけですから、個人の選択と国家の選択の関係は難しい問題です。おそらく選択についての最大の問題は、個人の選択と集団や共同体の選択の関係ということです。私は、この点に関しては、「ナショナル・アイデンティティ」の問題として多少は考えてきましたが、本日は時間の関係で触れないことにします。

大江健三郎は、自己の老いを感じているのでしょうか、最近若い人たちへ呼びかける作品を書いています。『「新しい人」の方へ』という本の中で、「未来にはみ出す」ということを言っております。彼は子どもの頃、よく台所に出ていた柱の梁に頭をぶつけた。しかし、大人になってからはそうした梁をよけるようになった。すぐ先の情景が目に見えてくるようになった。そのことを「未来にはみ出す」と言っているのですね。

「未来にはみ出す」心の働きも、想像力のひとつです。これから一年後、十年後に、自分や自分の周りの世界がどうなっているか。それを考えるのは想像力を働かせることですね？すぐさきのことに向けてそうするのも同じだ、といえは賛成していただけると思います。

そしてさらに、「未来の生活に向けてちょっとはみ出す心の働きは、じつは過去の経験によってきたえられた成果なのです」とも言っています。

彼が言うように、それなりに経験を積んだ大人が「未来にはみ出す」存在だとすれば、そうした大人が未来の希望を語ろうとしない、あるいは希望を語るができないとしたら、大人としての責任を果たすことができないばかりか、人間社会はいつまでたっても希望を持つことができないのではないかとわかれてきます。

ここでようやく本題のマルローの『希望』について話す順番が来ました。アンドレ・マルローという作家は、小説を書いたのは第二次世界大戦の頃までで、あとは『沈黙の声』(1951年)とか『世界の彫刻の空想美術館』(1952~1954年)といった世界の美術についての膨大な評論を書いています。また、レジスタンスの時期に知り合ったド・ゴール将軍が戦後大統領になったときに文化担当大臣として協力しています。小説が扱ったテーマにおいても現実生活においても、まさに「行動派」と言われる作家であります。

広東革命を背景にした『征服者』(1928年)、インドシナ探検を描いた『王道』(1930年)、上海革命に生命を賭ける『人間の条件』(1933年)、スペイン内戦そのものを描いた『希望』(1937年)、第二次世界大戦を舞台にした『アルテンブルクのくるみの木』(1943年)など、マルローの小説はつねに戦いや冒険のなかの人間を描いて、死を賭して戦うことに人間の尊厳を見ようとしているのが特徴です。ご承知のように、スペインの内戦は1936年7月にフランコ将軍を中心とする軍部の叛乱から始まりま

す。そして、1939年3月末に叛乱軍がスペイン全土を制圧して、内戦は終結します。マルロー自身は、内戦が勃発するとほとんど同時にスペイン政府支援のための活動を開始し、9月に国際義勇軍が設立されるとすぐに国際義勇軍飛行隊の指揮官として参戦しています。この体験をもとに、ほとんど同時期的に、ルポルタージュ風に書かれたのが『希望』という小説です。この小説には、多くのスペイン人だけではなく、国際義勇軍に参加した、さまざまな国籍を有する無数の人物が登場しますが、ストーリーは主として、スペイン人のカトリック信者ヒメネス大佐、何よりも人間的な信頼関係を重視する коммуニストのマヌエル、フランス人で国際飛行隊の隊長マニャン（マルロー自身をモデルにしていると思われる）の三人を中心に展開されます。第一編「抒情的幻想」では、国籍が違い、考え方も違う人たちがそれぞれの立場を示しながら、共和国スペインを守るという一点で戦闘に参加している姿が描かれます。第二編「マンザナレス河」では、マドリッドとその周辺をめぐる戦いの具体的な様子が迫力をもって描写される。第三編「希望」では、1937年2月の「マラガの戦い」、3月の「グアダラハラ」の戦いを、マニャンとマヌエルの活躍を通して描いています。この段階では政府軍の方がまだ優勢であった。物語の終わりでは、

（マヌエルは）ひょっとしたら、ヒメネスが言うとおり、自分の人生を見つけだしたのかもしれない。彼は戦争に目ざめ、死にたいする責任に目ざめたのだ。 （中略）マヌエルは生まれてはじめて、人間の血よりも厳粛なもの、地上における人間の存在以上に不安なもの、つまり彼らの運命の限りない可能性の声を聞いたのだ。 （岩崎力訳）

と書かれています。たいへんマルロー的な抽象的な表現によって、「自分の人生を見つけだした」ということが、「死にたいする責任」を感じる

ということ、自分たちの運命の限りない可能性を見出すこと、人生の意味を発見することでもあると述べられています。『希望』という作品はスペイン内戦が始まっておよそ8ヵ月、政府軍が優位を保っている時期で終わっています。マルローはなぜ、このルポルタージュ風な小説の最後の章に「希望」という表題をつけたのでしょうか。彼が希望と呼んだのは戦いに勝利するだろうという予測のことではないのは明らかです。たとえば、『人間の条件』においては、主人公の陳が蒋介石の暗殺を試み、失敗して自殺してしまいます。マルローは、テロが成功するか失敗するかを問題にしているのではなく、死を賭した行動そのもののなかに人間の意志と尊厳を見いだそうとしていたからです。このいわば「滅びの美学」はあくまで個人の行動です。この『希望』においては、人間の連帯、友情のなかに希望を見いだそうとしているのです。希望とは、ことばも国籍も違う人々がともに人間の正義のために戦うことができるという事実に対してであることは間違いないと思います。いったいなぜ国際義勇軍に参加した人たちはみずからの死を覚悟でスペインに赴くことができたのか。1930年代とはまさしくそのような時代であったということなのですが、1930年代というのは、ご承知のように、ドイツやイタリア、それに日本においてもファシズム勢力が台頭し、他方ではスペインやフランスで、左翼勢力が人民戦線内閣を結成します。世界全体が（といってもヨーロッパ中心ですが）ファシズム対平和勢力の戦いという様相を呈していて、したがって、ドイツやイタリアの政府に支援されたスペイン右翼の反乱軍に対抗して、人民戦線政府を擁護するために世界各国から志願した義勇兵がスペインに駆けつけたわけです。その数は全部で約5万人と言われてますから相当な数です。マルローは国際義勇軍の行動を「人間の意志」とか「人間の尊厳」ということばで表現していますが、別のことばで言えば、「人間としての責任を果たす」と言うこともできるものです。それは希望を持つことができた時代でもあります。1930年代

とは、そういう「人間としての責任」を果たし、希望を語る事ができた時代でもあったわけです。

注：川成洋『スペイン内戦』（講談社学術文庫 2003年）によれば、「現在においては、国際義勇兵の総数は、正確には掴みきれないが、55カ国から、ほぼ4万人の義勇兵、それに2万人もの大隊付の医療部隊をはじめ後方勤務についた非戦闘員、というのが定説のようである」ということになる。

この希望ということをもっと率直に歌い上げた作家・詩人にルイ・アラゴンがいます。そして、結論をさきにいえば、アラゴンの語る「希望」のなかに、現在の私たちへのヒントがあるように思われます。アラゴンは、ドイツ軍占領下のフランスのレジスタンスで、文学者たちの運動の中心的な存在でした。いわゆる「レジスタンス文学」という言い方は、戦後になってからそういう位置づけがなされたわけですが、ドイツ軍占領下では、作家たちは文学作品を通して、飢えと寒さに苦しんでいた国民に生きる希望を与えようとしたと言ったほうがより正確かもしれません。文学とは不思議なもので、単にレジスタンスを呼びかけるプロパガンダ的な作品よりも、人間性の本質を描く作品の方が人々の心を捉え、影響力を持つわけです。ヴェルコールの『海の沈黙』というレジスタンス文学の代表的な作品は決してレジスタンスのプロパガンダの小説ではありません。占領下の生活は毎日生きることで精一杯で、とても文学どころではないはずなのですが、しかし実際には人々は詩や小説を手書きして、自分が読むだけではなく、人にも伝えていきました。私が学生時代にこれらの文学に接したとき、これこそ「文学は国民全体のものとなるべきである」ということの現実的な実例だと思ったことは確かです。

アラゴンは、この時期に多くの詩を書きましたが、1944年に『フランスの起床ラッパ』という題のレジスタンス詩集を出しています。そのな

かの「ストラスブール大学の歌」には有名なこんな一節があります。

教えるとは、希望を語ること Enseigner c'est dire espérance
学ぶとは、誠実を胸にきざむこと Etudier fidélité (大島博光訳)

ストラスブールという都市は、いまはヨーロッパ連合関係の建物がたくさんあって、統一ヨーロッパのシンボリックな都市となっていますが、歴史的にはフランスとドイツの国境線上にあって、さまざまな戦いが繰り返されたところです。有名なアルフォンス・ドーデーの「最後の授業」のエピソードもその一つです。ストラスブール大学は、ドイツ軍がフランスに侵攻したときにフランス中部の町クレルモン＝フェランに引っ越していたのですが、その大学の建物に、1943年11月ドイツの警察が踏み込んで、講義中の一人の教授を銃殺してしまいます。それに抗議した多数の学生も逮捕され、銃殺された学生も出たということが知れわたりました。アラゴンがその様子を詩に歌ったのが「ストラスブール大学の歌」であります。

ここで、この詩に私なりの、いまの時代に対応した解釈を付け加えてみたいと思います。この訳詩では「教えること」と「学ぶこと」とが並列的な印象を与えますが、それは「胸にきざむこと」という訳があまりにも名訳なせいであって、むしろ「誠実さをもって答えること」ぐらいに訳した方が前の句とのつながりがはっきりすると思われれます。大事なものは、教えるものと学ぶものとの深い絆であり、人と人との信頼関係です。希望も誠実も、人間と人間との信頼関係のなかでこそその意味を持つことができるということなのです。教える立場のものが希望を語りうるのは学ぶ立場のものが誠実にそれを受けとめることを信頼しているからであり、また、学ぶ立場のものが誠実であり得るのは教える立場のものが若い世代への希望を託して語っていると信頼しているからでありま

す。これはまさに教育の原点であります。

私は本日の演題に「今日希望を語ることができるか」という、我ながら大げさなサブタイトルを付けました。「希望」ということばを率直に語りえない、なにか空々しく響いてくるのはまことに悲しい時代ですが、この死語になりつつあることばを再生させるためには、教えるものと学ぶものとの相互に信頼しうるような関係を回復する以外にはあり得ないと思います。

先ほど大江健三郎の「未来にはみ出す」ということばを紹介しましたが、大人がみずからの人生経験の成果を語ることができるとすれば、それは「希望」を語ることにほかなりません。そして、「希望」は人と人との関係を抜きにして生じることはあり得ません。

注：サルトル最晩年のインタビューに『いま希望とは』がある（『朝日ジャーナル』、1980年4月～5月）。サルトルにとってそれは一種の「祈り」であって、まさに絶望の裏返しのように思われる。たとえば、「とにかく、世界は醜く、不正で、希望がないように見える。といったことが、こうした世界の中で死のうとしていた老人の静かな絶望さ。だがまさしくね、わたしはこれに抵抗し、自分ではわかっているのだが、希望の中で死んでいけだろ。ただ、この希望、これをつくりださなければね。」（海老坂武 訳）と語っている。

それでは、このようなことばの再生はどうしたら可能でしょうか。たいへん難しい問題ですが、人と人との関係を見事に語ったものとして、サン＝テグジュペリのよく知られている『星の王子さま』（1942年）のエピソードを最後にご紹介したいと思います。

星の王子さまは、いろいろな星を巡って地球にやってきます。彼はその間に人生勉強をするわけですが、地球では、一番大切なことを一匹のキツネから学ぶことになります。王子さまはまずキツネから、「飼い馴らすこと」、フランス語でapprivoiserということを学びます。サン＝テグジ

ユベリ自身「関係を結ぶこと」だと説明していますが、先ほどのことは
で言えば、人と人との信頼関係を結ぶということであります。それには
作法と時間が必要です。つまり、この小説では、毎日少しずつ、キツネ
に近づくことになっているんですね。その上で、キツネは「大事なことは
目には見えない。心でしかわからない」と教え、さらに、「自分が関係を
を結んだ相手にはいつまでも責任があるんだ。君は君のばらの花に対して
責任がある・・・」 Tu deviens responsable pour toujours de ce que
tu as apprivoisé. Tu es responsable pour ta rose.....と、キツネはコン
コンと諭します。

「責任」ということを先ほど「選択」との関係で申しました。残念なが
らいま「責任」もまた死語になりつつあります。責任とは「人のせい
にしない」ということでしょうか、責任が死語になったのは誰のせい
かと問うことは自己矛盾ですが、しかしその多くの部分が戦後の歴代
の政治家たちのせいであることは間違いないところです。マニフェ
ストといったカタカナ語を使うのは、まるで責任を持たないと宣
言しているように聞こえてきます。

ところで、ここでキツネが言っているresponsibleは、ラテン語の
responsus,英語のresponseですね。つまり、「責任がある」というのは、
「応答する、返事をする」ということです。私が言いたいことは、人
に対してきちんと「応答する」ということです。そして、ただやみく
もに応答するのではなく、誠実に正面から応答することが大事だと思
います。私は最初に、将来への希望がもてない現実として、自殺者の
増加や年金不信の状態について触れました。このような現状を打開す
るためには経済政策の転換や年金制度の改善など、政治的な解決が
不可欠です。そのためにはすでに政治的解決能力を失った現在の政
府に代わる別の政治も必要なのは言うまでもありません。しかし、
次にどのような政治や時代を想定するのかを示すためにも、やは
り何事に対してもつねに積極的に

応答していくことが大事であり、そのことが「希望を語りうる」第一歩ではないかと思われまふ。冒頭に触れた「心がむすぼれている」状態では、応答はできません。応答には柔軟な精神と思考が不可欠です。この柔軟さは若者の特権でもあります。また、グローバルな時代には世界中と瞬時にして応答が可能です。そして、この応答ということは、いわゆる「古典」といわれるすぐれた著作を読むということでもあります。冒頭で、プルトンの『ナジャ』が20世紀の古典になりつつあると言いましたが、すぐれた作品は間違いなく古典として後世に残ります。古典との対話もまた大事な応答です。若いあいだに是非読書をして下さい。

今日は「希望」についてどこまで語りえたかわかりません。しかし、「希望」ということばの再生を願って語ることがどうしても必要だと思って本日のテーマを設定した次第です。「希望」ということば、「責任」ということば、これらの大事なことばが死語になってしまわないように、これからもお互いにレスポンスを繰り返していきたいと思ひます。

たいへんつたない話を、最後までご静聴いただきましてまことにありがとうございます。